



学校だより (17)

事務所 947-3111 ・ 授業日 291-1591

◇<http://www.hjschl.org>

◇e-mail info@hjschl.org

「だから悪い」

校長 福原輝幸

ある学校でこんなことがありました。

「生徒三人の内の一人が、登校の途中で拾ったライターを学校へ持って来ました。その内の一人が、面白半分に火がつくかどうか試し、紙を燃やそうとしました。もう一人もやって見ました。予想通り火はつき、紙は燃えました」ところが、三人は、その現場を見回りに来た先生に見つかってしまいました。

当然のことながら、見回っていた先生は、子どもたちに「なぜしてはいけないのか」について指導をします。担任の先生は、事の重大性から保護者にも連絡し、来校いただき、この間の経過を説明し、二度とこのようなことをしないように指導をします。

人間、長い人生の内には一度や二度のあやまちや失敗は必ずします。否、むしろ人生はあやまちや失敗の連続かもしれません。しかし、自分の行為を反省し、自らのあやまちや失敗に気づき、それを乗り越え、二度と同じあやまちや失敗をしないようにしようとするところから進歩や向上が生まれます。

ところが、三人の内、一人の火をつけていない子どもは、なぜ自分が叱られているのか、叱られなければいけないのか分からないし、その保護者も、そのことが理解出来ないとしたら、教育の場において、これほど悲しくてつらいことはありません。

ただ単なる知識の蓄積だけでは「何もしていないのになぜ悪い」と自分の行為を正当化し、他者への思いやりややさしさなどどこ吹く風とばかりに涼しい顔をして平然と通りす

ぎていく「人間ロボット」「心のさみしい人」になる危険性を持っています。

人間が、人間として、人間らしく生きていく人間を育てるためには、他者の悪い行為に「自分は何もしていない。ただ見ていただけだ」と言う子どもに対して「だから悪い」と言い切れる人間に育てなければなりません。

一個の人間

武者小路 実篤

(むしゃのこうじ さねあつ)

自分は一個の人間でありたい。

誰にも利用されない

誰にも頭をさげない

一個の人間でありたい。

他人を利用したり

他人をいびつにしたりしない

その代わり自分もいびつにされない

一個の人間でありたい。

自分の最も深い泉から

最も新鮮な

生命の泉をくみとる

一個の人間でありたい。

誰もが見て

これでこそ人間だと思ふ

一個の人間でありたい。

一個の人間は

一個の人間でいいではないか

一個の人間

独立人同志が

愛し合い、尊敬しあい、力をあわせる。

それは実に美しいことだ。

だが他人を利用して得をしよう

とするものは、

いかに醜いか。

その醜さを本当に知るものが

一個の人間。(裏へ)